前橋教会・共愛学園・同志社

森下徹造

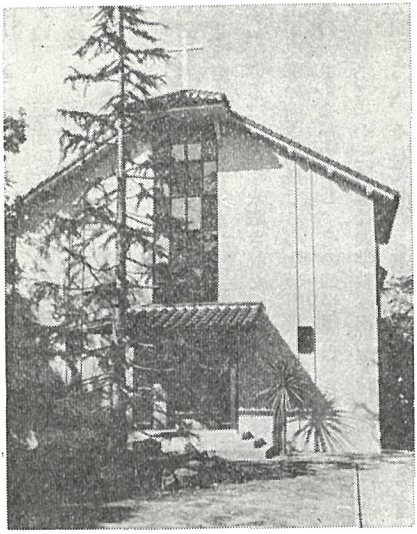
前橋教会

わが前橋教会は、創立されて九十年になる。この異教の地に伝道が開始されたのは明治十年頃である。明治七年、米国の留学から帰国された新島襄先生は、直ちに安中におられた老父母を見舞われた。まことに短い滞在であったが、キリストの福音を話された。新島先生によって播かれた福音の種は最初の収穫となって実を結び、明治十一年三月三十一日に安中教会が設立されたのである。明治十三年には同志社を卒業した海老名弾正先生を牧師として招聘した。海老名先生の安中における伝道は、目覚ましいもので、地方の指導的人物を信仰に導いたのである。海老名先生は、上州伝道の中心は安中より県庁所在地の前橋であることを決意し、明治十七年安中を辞して前橋に移転したのである。その当時、教会は紺屋町（現在商店街、千代田町四丁目）の狭い日本家屋であった。余り手狭なので、海老名先生は遺産から三百円を取り替え、有志の寄付二百円を集めて同じ紺屋町の空地に二十坪余の小会堂を新築した。海老名先生は前橋に二年しかいなかったが、わが教会の基礎を築いたのであった。

またその頃、神学生が輩出し、女子二名は神戸女子伝道学校に、男子の四名は同志社に、それぞれ入学をしたことは驚くべきことである。

さて、後に同志社の宗教主任として、同志社教会牧師として、十四年間にわたって同志社の宗教教育に多大の貢献をされた堀貞一先生は、かつてわが教会の牧師であられたのである。先生は、明治三十二年三月から四十二年七月ホノルルのヌアヌ教会へ赴任されるまで約十年間、大挙伝道、集中伝道、拡張伝道等、次々と果敢な伝道を展開して成果を挙げられた方である。当時、会員名簿には大変異質な人の名前が出てくる。その一人は高畠素之である。明治三十六年七月五日堀先生から受洗をしている（十八歳）。彼は、後に国家社会主義者となり、日本で最初の「資本論」の

翻訳をした。会員名簿摘要欄に、「社会主義の主張と実行は教会規約に依りて会員として在籍せしむるに能わず依りて除名す。明治四十一年十二月執事会」と記されている。もう一人は井上四郎。彼は明治三十八年三月十二日に堀先生から受洗している(二十歳、学生)。後の国家主義者日召である。彼は血盟団を組織し、血盟団事件の張本人である。会員名簿摘要欄に、「井上昭と改名し天津に住居の由(大正九年十一月)大正九年十二月役員会で別名簿」と記入されている。堀先生のお墓は当市の利根橋の近くの長昌寺内の教会員の墓地にある。



前橋教会

明治初期のキリスト者の特質ともいうべきものを二、三挙げるならば、その一つは、新日本建設と信仰とが不可分の関係をもち、キリスト教こそが新日本を建設するものであるとの自覚をもっていたということである。今一つは、初期の中心的なキリスト者たちは急激な社会変化と、そこから生ずる社会問題に対して積極的な責任を負ってきたということである。社会事業(上毛孤児院=現在は社会福祉法人上毛愛隣社、前橋養老院)、教育事業(前橋英和女学校=後共愛学園と改称)、公唱廃止の運動、明治三十年代前半でも、わが教会は社会問題を先取りし、各領域で先駆者となって活躍したことは刮目に価する。

後程までも影響を与えた出来事は、一九二八年(昭和三年)十月二十二日、共愛女学校職員と生徒は周再賜校長の下に、前橋教会を分離、校内で集会を催すことになり、十一月四日共愛同信教会を設立したということである。このことは、わが教会の周章狼狽ははなはだしかったようである。わが教会略史は、「この事たるや今後の我教会の教勢に甚大なる影響を及ぼすこととなれり」と記している。それはこれまでの日曜日礼拝の大半は共愛女学校寄宿生と職員で占められていたからである。それからというものは、前橋教会と共愛学園との関係はよくなかったようである。

しかし、最近、牧師が学校法人共愛社の理事長に就任して以来、わが教会の共愛学園に対する関心は深まったように思われる。わが教会員の一人は理事に、一人は監事となって学園の経営に当たっている。少数のキリスト者職員の中の大部分がわが教会員である。わが教会が伝統のある共愛学園の発展のために貢献する責務がある。共愛学園の創設に際して、献身的な働きをした先輩たちの大いなる信仰と祈りに励まされて、与えられた責任を果たして行きたいと念願するものである。

共愛学園

わが共愛学園は今から八十九年前、すなわち明治二十一年二月二十九日に前橋英和女学校として設立されたのである。当時女子は学

問すべきでないと考えられていた封建社会において、最も底い女子の社会的地位の向上のため、その当時、前橋教会の牧師であった不破唯次郎氏が中心となって、数名の中堅キリスト者と相談の上設立したもので、県下で最も古い学校であって、その卒業生は約八千名、よき家庭夫人として、また社会人として活躍をしている。一昨年永眠された同志社校友会群馬支部の前支部長であった半田隆一氏の夫人のぶさん(元同窓会長)、その姉半田ふじさん(同志社女専卒)や元同志社大学教授鶴見俊輔夫人貞子さん、それにオペラ歌手成田絵智子さんらは共愛学園の卒業生である。

この学園の初期の頃は前橋教会牧師、不破唯次郎、杉田潮、堀貞一氏らが校長を兼務していた。堀貞一牧師の頃に共愛社が組織され、大いに発展した。当時校長は無給であった。堀先生は、「全くの名誉校長で、毎年一回教師たちにご馳走をするのが校長の特権であった」と語っておられる。

今日の共愛学園の礎石となったのは周再賜先生である。周先生がわが学校の校長に就任したのは、今から五十一年前、すなわち大正十四年九月のことであった。彼は同志社大学神学科助教授の地位を捨てて本学園の校長になった。その当時の生徒数はわずか二七二名にすぎなかった。彼は学園の狭い敷地を拡張し、校舎を増設していった。このために、日夜心血を注いで労苦したのであった。

ところが、昭和二十年八月五日の前橋市空襲のために、長い年月の間苦心して建設した校舎が全焼して灰燼に帰してしまった(約一、三〇〇坪焼失)。この時、彼は一時絶望の余り利根川に投身自殺しようと考えたらしい。しかし、彼は焦土の上に立ち上がったのである。彼は、全職員を集めて悲痛な思いで言い渡された。「学校は諸君の見られる通り焼けてしまった。いつ始めることが出来るか分からない。私と一緒にこうして当分共同生活をして、どこまでも、この学校のためにやろうと思う人はおって下さい。この際ですから不安心だと思われる人や、都合の悪い人は遠慮なくやめて下さい」と。そこで、事情のある三、四名の職員がやめただけで、大部分の職員は周園長と一致結束して学園復興のために、献身的な働きをされたのである。私が、たまに夜お宅に伺うと、まだ校長室で仕事をしておられた。暖房は小さな火鉢であった。一枚の用紙も無駄にせず、メモなんかは広告用紙の裏を用いたり、封筒の裏返しをして利用された。先生は自ら節約に節約をして、今日の共愛学園の復興をされたのである。昨年十一月二十九日午前十一時から賜千会主催で『周再賜先生の生涯』の出版記念と周先生を偲ぶ会が学園講堂で催され、同窓生ら約百二十名が集まった。その席上で、周先生の友人である桜美林大学学長の清水安三先生は、「台湾に生まれながら日本の共愛のために一身を捧げた周先生は、現代の鑑真のようだ。教育は結局愛である」と、周先生を讃えられた。

周先生が四十年間全身全霊を傾注して築き上げられた学園は、次第に充実発展しつつある。現在中学生九十六名、高校生九五八名、合計一、〇九四名の生徒たちが本学園に学んでいる。生徒の進路状況は、進学率六十七%、そのうち教育同盟の大学・短大に進学するものは一〇%、いずれも推薦入学である。私としては、もっと多く大学に進学して欲しいと願っている。この学園で培われたキリスト教的世界観、人間観がそうした関係の大学に入学することによって結実するのではなかろうかと思うのである。

今や、公立高校の増設にともない私立学校は極めて厳しい情況に直面しているのである。私たちはこの容易ならない時に際し、私学の存立の意義が改めて問われる。キリスト教主義を標榜する共愛学園の今日的使命は一体何んであるかを謙虚に、真剣に問いながらこの時代のニードに充分応答し得る体勢を整えることが最も肝要であると考えられるのである。精神的、宗教的なものへの無関心な、いわゆる世俗化現象の中で、他の公立学校では与えることのできない、わが学園独自の教育を推進してゆくことは至難ではあるが、ユニークな宗教教育を、今日までやってきたがこれからも一層行わなければならぬ責任を痛感するものである。今日は進学重点主義の教育が行われて、真の人間教育がなおざりにされている。真に生ける神を畏れ、自分よりも他者を愛し、そのために自分の身を犠牲にして顧みない精神、この精神を若者の心に植えつけることが、「人間性」を豊かにはぐくむことではなかろうか。こうした意味から、県下の各教会の牧師さんたちに毎週火曜日の朝礼拝の説教を担当していただき、できるだけ教会の協力関係を緊密にするようにしている。教育同盟加盟の学校の転入学、進学はもっと容易に出来ないものかと思うのである。キリスト教主義学校の志向しているものが、同盟加盟校の人事の交流、生徒の推薦入学等の拡大によって達成できるのではなかろうか。

この学園は、一年後に創立九十周年を迎えようとしている。その記念事業として体育館の建設や、グラウンドの整備等に着手、またさらに百年を目指して長期計画も種々検討中である。この学園が一朝一夕に生まれたものでないことを思うと共に、今日よい遺産を継承していることを感謝しているだけではすまされない。私たちは過去の歴史に励まされ、新しい自覚をもってこの学園をさらに発展させてゆかねばならないと考えている。

同志社

かつて同志社に学んだものは、わが母校が創立百年を迎えて大いに成長発展したことに驚異を感じると共に、大いなる誇りに思っている。新島先生がキリスト教主義教育を同志社の目的とお定めになった。そして同志社は創立当初から今日にいたるまで、「キリストの精神を己が精神とする人物」を育成するために努力してこられたことと思う。私は今日、この精神を明確にして、もっと強力に推進していただきたいと思うのである。

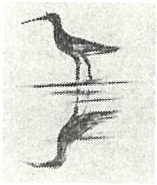
さて、かつてわが共愛学園からは同志社女専・大学に入学したものがかなりいたようである。同志社卒業生が、現在二名、学園の教師をしている。昭和九年頃、同志社女専の北関東地域の入学試験が共愛学園で実施され、その時、合格して女専で学んだ阿久津はま子さんは母校に帰って教師となり、今日は学園の監事をしておられる。私は、本県にあるもう一つのキリスト教主義学校新島学園から同志社大学に推薦入学の道が開かれているように、わが学園にもそのような特典が与えられないものかと思うのである。かつてのように同志社と共愛学園との親密な関係が回復されることを切望するものである。

（昭和十五年大学文学部神学科卒
前橋教会牧師　共愛学園理事長）

＊　＊　＊

柏木義圓素描

笠原芳光



与板を訪れたのは越後平野の稲もすでに刈りつくされた昨年の晩秋であった。

万延元年、桜田門外の急変の報はこの静かな土地にも伝えられたと思われる三月九日、ここに生まれたのが柏木義圓である。柏木がその生家である浄土真宗東本願寺派の西光寺を出て、新潟から東都に遊学し、やがて群馬県安中の近くで小学校教員を勤め、その間に海老名弾正に接し、同志社に学び、新島襄の絶大の信を享け、同志社予備校に教え、後半生は安中教会を牧し、とくに非戦と社会正義を主張して一貫不惑の生涯を送ったことはすでによく知られている。

柏木義圓を調べるようになってから十数年になるが、こんど評伝を書くことになって初めて生地新潟県三島郡与板町に足を運んでみた。信越線の長岡からバスの便があることを知らずに遠廻りして越後線の小島谷から車を走らせる。夜行列車の疲労が朝の冷気に薄れてゆく頃、閑静な町並みを通って西光寺を探しあてる。「柏木山西光寺」という表札のかかった小さな比較的、新しい寺院である。住職の安部昭信氏は昭和初年に郷里をたずねた柏木の講演を聴き、面談したとのこと。だが往時の寺はこの上町ではなく、馬場町にあり、明治十六年の大火に焼失したという。

馬場町の小高い岡にむかって疎林があり、そのかかりに民家が建っていて、そこが旧寺の跡である。小径をはさんで、いまも寺領の墓地があり、蒼然とした墓石が点在する。おりからの曇天ならずとも鬱々とした雰囲気である。ここに呱々の声をあげ、幼少期を過ごした柏木は、やがてこの地を去っていく。それはこの小暗い風土への訣別でもあったのかと、その心の裡をおもいやっていると、にわかに雷鳴がとどろき霰が降ってきた。思えばそれはあとにくる豪雪の先触れであった。

柏木義圓の生涯において、仏教からの離脱とキリスト教への回心は重要な事件である。にもかかわらず、それは不鮮明の印象を拭うことができない。西光寺八代目住職柏木徳圓は、息子の義圓が生まれて間もなく死去、や

がて戊辰の役、与板藩の崩壊といった風雨にさらされて寺は荒廃していく。このような事態が少年の眼にどのように映じたかは想像にかたくない。

それにしても、柏木は仏教、なかんずく浄土真宗に冷淡であり、親鸞の著作などは不勉強でさえあるとおもわれるのはなぜか。僧侶の子弟で得度までしているにもかかわらず、

柏木義圓とその子女。右端が七羊氏。
（昭和３年頃、安中教会堂前）

その仏教からキリスト教への転回には苦悩があったようにも思われない。大正五年十一月の『上毛教界月報』の「予が回心の顚末」には「仏教に関しては予は其内部に在て聊か其内幕を窺知して居るから人心改善の実力など殆んど零で、此点に於ては到底基督教の敵ではないと思つて居た。其理論的方面では通俗実際の仏教は概ね卑陋なる迷信で少数学究の仏者は多くは高遠なる空理を弄するのみ、予は仏門に生れ乍ら多くの敬意を仏教に払はず、寧ろ儒教を尊敬して居た」とある。

また同じく昭和七年四月の「基督教独有の三大事実」には「仏教は苦より解脱するの教で、基督教は罪より救はるるの教である。仏教は悟りの宗教で深い高い意味での道義の宗教では無い。反つて道義を超越するを達として居る。浄土真宗では道義は所謂世間通途の義に準ずるとて世間が多妻を是認すれば其宗教も亦之に準じ、別に道義の理想などは無いやうである」などと記している。

浄土真宗の僧侶でありながらキリスト教を奉ずるに至り、「全家切腹」と表現するほどの悲痛なる決断をもって改宗、本山から除名され、しかも終生郷里富山県にとどまって伝道した亀谷凌雲という人物がいる。それに較べると、柏木の仏教からキリスト教への道は改宗というよりも移行といったほうがよい。およそ柏木にとって仏教は信仰の対象ではなく、因襲の制度に過ぎなかったのではないか。

＊

「宗教と国家」という問題は、明治時代のみならず近代日本の難問の一つである。

内村鑑三の不敬事件に端を発する「教育と宗教の衝突」論争は、その最初の火花であったが、内村のこの問題に対する解答はけっきょく、のちに語った「二つのJ」という言葉にあらわされるだろう。これはJesusとJapan、イエスと日本の二つの元素のいずれをも重要とするという並列的な二元論の立場である。しかし内村はこの楕円状の真理をさらに展開し、深化することなく終った。

ところで柏木義圓はこの問題をどのように考えていただろうか。明治三十三年の秋に進化論者として著名な加藤弘之が「仏基両教の急処を衝く」という一文を『太陽』に発表し仏教やキリスト教のような世界宗教は国家と矛盾する教えであり、その教旨を貫くために

は国家の外に出るか、それとも国家に忠良なる民となるためには教徒たることをやめるかのいずれかであると主張した。それに対し、柏木は『東京毎週新誌』に国家を代表する政府の方針と宗教の精神は衝突するとしても国家本来の目的と宗教は矛盾しないと反論した。国家を現状の国家ではなく、あるべき国家としてとらえているところは、単純な二元論ではないといえよう。

さらに柏木が明治四十一年七月の『上毛教界月報』に発表した「予が信仰の論理」は、柏木の思想がどのように素朴二元論と異なるかを示すものとして注目に価する。これは、直接には新神学、すなわちイエスは人間における最高の存在であるが神ではないとして、科学と宗教の矛盾を排除しようとする説に対する批判であるが、同時に国家と宗教の矛盾という問題に応用できる論理でもあった。

その冒頭に、「幾何学に依れば楕円には二個の中心ありて、其正円に近づくに随ひ、其両中心も亦次第に相近づき、完全なる正円となれば遂に始めて一個の中心と相成候。斯の如く人智の未だ不完全なるや宇宙人世の事も亦往々二大事実の相矛盾せるありて、随て二個の中心を立てて説明せざるを得ざるの観有之ものにて候」とある。これはこの世界の真理の形を「正円となりつつある楕円」としてとらえ、人間には矛盾がなお多く存在するけれども、やがては解消されるものと見、しかしそれまではその矛盾を認めざるを得ないという考えかたである。

これを宗教と国家という問題の類比として考えれば、宗教と国家の矛盾対立はやがて止揚されるものとしてとらえられており、それまではむしろ両者の相剋がなにかを生みだしていくという態度として受けとることができる。これは静的な二元論ではなく、動的な二元論であり、一元を究極とする二元論というべきものである。またこれは理想主義に立つ現実主義といってもよいのではないか。ここに日露戦争から日中戦争に至る三十数年間にもわたって現実に押し流されることなく、逆に現実を撃ちつづけた柏木の思想の根拠があるように思われてならない。

柏木が生涯にわたって執筆した著述のほとんどは、『同志社文学』と『上毛教界月報』に掲載されているが、それらのテーマは信仰の問題と社会の問題に大別されるだろう。この二つの問題は、一見、領域を異にして、たがいに無関係であるようにおもわれる。しかしながら、そのなかには両者をつなぐ論理、かかわらせる思想というものもいくつかは含まれている。いまあげたのはその一つである。といっても柏木はかならずしもそのような思想の探求や表現に長じていたとはいえない。それはむしろ読者の解釈と洞察の問題になるのではないだろうか。

＊

柏木義圓の九代前の先祖は上州安中の人である。柏木が生涯の半ば以上をこの町で過ごし、そこに骨を埋めたのも決して偶然ではない。安中はまた新島襄や湯浅治郎を生んだことにおいて日本のプロテスタンティズムの原点の一つであり、とくに同志社にとっては京都についで、ある意味では京都以上に重要な土地である。

同志社大学人文科学研究所のキリスト教社会問題研究会がこの安中の史料調査に着手したのは、ようやく四年前のことである。その研究会のメンバーとしてこの三年間、毎夏、武邦保、萩原俊彦両氏とともにこの地を訪ね

てきた。そして柏木義圓の長男の未亡人である柏木清子氏から、所蔵の柏木義圓関係の文書や写真約一千点の借用を許され、目下その整理に当たっているところである。

史料の多くは書簡類であり、そのなかには柏木の子女が各地から父親に出した手紙も相当残っており、逆に柏木が家族に与えたものもすくなからず保存されている。とくに柏木の最後の書簡というものがあり、貴重な文字であるのでここに全文を紹介したい。安中の隣町原市で牧師をしていた長男に宛てたもので、昭和十三年一月三日といえば、柏木の死が一月八日早朝であるから、僅か五日前、まさに絶筆である。手紙には句読点がないので適宜補い、改行の部分に／印を付したほかは原文のままである。

「昨日は嬉れしかった。特にかづのぶ君が元気でやつて呉れて嬉しかった。／近頃特に忘るゝのが甚しくなつたやうです。併しからだの方はなかなか元気、寛一君精々遊びに来玉へ。／どうぞお向ふへよろしく。／田中京四郎さんは私と同年ながらなかなかしつかりして居られ、益々世益を図つて居られますが私の如き慚愧の至りであります。／我日本は実に天然に恵まれ、良地勢であり乍ら、真の御恵みをたうとばず、敢て大陸へ出て武力を恃む、実に天与を空しくするもの。／何事も先ず神を識りて而して後ちの事なる可し。日本の基督教の自覚！／お墓の事はお金の方は私が出しますから万事よろしく願ひます。／寛吾は実に親切に致して呉れます。大四郎が来て呉れて嬉しかつた。／唯七公の事が気にかかります。どうかしつかりやつてくるればよいが。／八千代は私の為には至つて結構だが前途は如何。併し川村さんの今の夫人の如きもあります。主は必らず何事かして下さるでせう。八千代が此の手紙を見たので私は心配致しました。／一月三日夜　父より／隼雄殿」

中国大陸への侵略が始って半歳に近い頃である。このような家族同士の私信のなかにさえ「武力を恃む」国家への批判を記さずにはいられなかった柏木の抵抗精神をおもわざるをえない。文中に「唯七公の事が気にかかります」とあるのは柏木の六男で七番目の子供であった七羊氏を指す。早稲田大学を中退し、たまにしか安中に帰らず、柏木がひそかに案じていたことがここにあらわされている。いわば柏木家の異端児で家族の集合写真には一人だけ長髪の文学青年の風貌で写っているのがこの人である。

現在、七羊氏は東京の鷺宮に在住しており、与板に行く前日、訪問して話を聴く機会を得た。氏によると、柏木の思想はなによりも反権威主義であり、それはおそらく同志社において体得したものであろうとのことである。氏は父親に対する敬意を十分に持ちながら、自由な道を歩んだ。家族でただ一人だけ洗礼を受けなかったけれども、柏木はそのことに寛容であったという。

氏は昭和初期のプロレタリア芸術運動に参加し、『ナップ』の昭和六年四月号には「大森二郎」の筆名で「青年達よ遺業をついで」というシナリオを寄稿したりしている。戦後の初期には日本共産党に入党したが、人間よりも組織を重視する傾向に同調できず、離党したという。父親の反権威と自由の思想を別の形で受けついだともいうべき七羊氏に向かいあいながら、柏木義圓という人物の大きさを思いやっていた。

（昭和二十九年大学院神学研究科卒
京都精華短期大学教授）

キャンパスに育つ蝶

窪田哲三郎

1

別に珍らしい種類が見られるわけではないが、四季の移り変わりに従って、次々に新しい蝶がキャンパスを彩るように出現してくるのは、やはり楽しいものである。ときには、はっと目をみはるような見事な光景に出あうことがある。例えば——

御所の樹々が、あの見事な紅葉に染まり始める十月下旬の午後のひととき、高校地理の授業が「林業」にはいったので、構内の樹木を生徒と一緒に視て回っていた。校長室前のトベラの木をみると、ちょうどそこだけが、和らかい秋の日射しを受けて、暖かそうな日だまりになっている。葉の上に、一見したところ、蛾のような小さな蝶が何十匹となく集まって、日向ボッコをしていた。翅を閉じていると、裏面が濃い茶褐色で少しも目立たないが、翅を開くと、表面が鮮やかな青紫色に輝き、実に美しい。木をゆすってやると、いっせいにパッと舞い立って、キラキラと宝石のように光る。しばらくの間、生徒たちと一緒に見とれていたことだった。冬も間近に迫った今頃、どこからこんなにたくさんの蝶がやってきたのだろうか、と生徒たちは不思議がる。この可憐な蝶はムラサキシジミといい、実は春から現われて、数回の発生をくり返しているのだが、秋になると特に多数の個体が発生する。もうしばらくたつと、常緑樹や草の葉裏に、ときには集団をつくって、成虫のまま越冬するはずである。幼虫はアラカシの葉を食べて育つから、アラカシの生け垣の多い女子部構内に多くみられるのであろう。

トベラといえば、栄光館正面に大きな丸い植え込みがあるが、白い小さな花が鈴なりに咲く五月中旬の頃、アオスジアゲハが盛んにここを訪れる。市街地にもっとも普通な蝶であっても、黒地をつらぬいた太い青帯は、南国の海と空の青さにも似て、見れば見るほど美しい。細かく翅をふるわせながら、敏捷に花から花へとび移り、華やかな女学生の行きかうキャンパスの一角に、もう一つの華やかさを添えている。この蝶の食樹はクスノキで、これも構内にたいへん多い樹木である。

2

栄光館の前には木立で囲まれた防火用水池があり、そこには二本のエノキがとりわけ高くそびえている。エノキが「縁結び榎」や「縁切り榎」として、また乳神として信仰される、女性と縁の深い神樹であることを最近

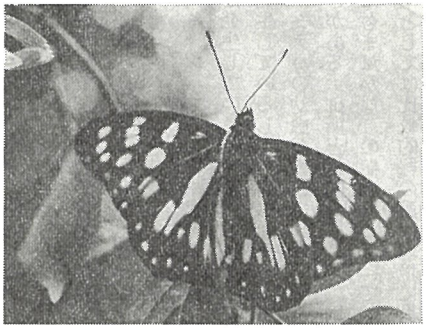
知った（週刊朝日・植物百科）が、この樹は蝶の愛好者にとってもたいへん有り難い樹の一つである。

アオスジアゲハがトベラの上をしきりに飛びかう五月半ばの頃、一段高いエノキの梢を仰ぐと、黒地に白い斑を浮かしたゴマダラチョウが、軽やかに滑空するように翔んでいるのをみかけることがある。この蝶の幼虫はエノキの葉を食べて成長する。冬になって、根際の枯葉を一枚ずつひっくり返してゆくと、葉裏にしがみついて越冬している幼虫を何匹となくみつけることができる。すでに夏の間に、母蝶が産みつけた卵からかえった幼虫は、葉を食べながら四令まで成長し、秋になって紅葉が始まると、緑色の体色を樹皮や枯葉に似せて灰褐色に変えながら、しだいに地面へ降りてきて、十一月下旬には、根際の落葉の下で越冬にはいるのである。この幼虫、ほうっておくと清掃好きな作業員さんに掃き捨てられ、焚き火の煙と消えていくのもかわいそうで、気の向き次第、家に持ち帰り、水苔を敷いた植木鉢の中に入れて冬を越させ、春になって動き始めたら、元の樹に止まらせてやることにしている。あるいは、庭の片隅に小さなエノキを植えてあるので、これに放ったりしている。四月になって、エノキに花が咲き、若葉が茂り始めてくると、幼虫は樹

落葉の下で越冬するゴマダラチョウの四令幼虫

ゴマダラチョウの老熟幼虫

ゴマダラチョウの蛹



羽化したばかりのゴマダラチョウ

上に登り、再び摂食を始める。若葉を少しかじるとまもなく脱皮する。すると、体色は鮮やかな緑色に変わって、青葉に対する完全な保護色となり、老熟するまで変わらない。そして葉裏にぶら下がって緑色の砂糖菓子のようなきれいな蛹となる。これから蝶が羽化してくるのが、先に述べたように、五月の中旬か、あるいは下旬の頃である。とにかくこの蝶の幼生期、環境の変化に対応して体色を変えていく過程は、見事というほかはない。国蝶として有名なオオムラサキは、ゴマダラチョウと非常によく似た習性をもった、より大型の、雄の翅は紫色に輝やく豪華な蝶である。

3

六月の初め頃、エノキの木陰を駐車場にしているマイカー族から、妙な苦情を聞くことがある。血のように赤い液が屋根やボンネットにこびり着いて気持ちが悪いが、あれは何だろう……。その頃、栄光館前の植え込みのそこここに、赤地に黒い紋のあるヒオドシチョウが、朝の陽光を浴びてゆったりと羽を拡げているのを見ることがあるが、犯人はこの蝶である。蛹から羽化した直後に、成虫は腹端から赤い体液を放出するからである。

ヒオドシチョウの幼虫は、同じエノキの葉を食べ、同じタテハチョウの仲間であるのに、ゴマダラチョウのそれとは似ても似つかぬグロテスクな毛虫であるのも面白い。こちらは毛むくじゃらな毒々しい姿をあらわすことによって、小鳥やその他の天敵の嫌悪感を呼び覚まし、身の安全を図っているのだろうか。幼虫はエノキの小枝にぶら下がって蛹になるが、食樹を離れてかなり遠い場所で蛹化している場合も多い。中には栄光館を裏へ回って、食樹から三〇米も離れた教務室の窓枠にぶら下がっていたりする。食樹以外で蛹化するとき、自然の木の枝などより人工的な建造物を好む傾向がある。門衛所の軒下とか池の周囲の竹垣とかは、その場所として分からぬでもないが、水道の蛇口や屑かごの金網にぶら下がっているのは、少々そそっかしい連中かもしれない。しかしこの蝶も七月になると、キャンパスから全く姿を消してしまう。暑熱を避けて夏眠にはいり、避暑の昼寝としゃれこんで、秋にいったん姿を現わすものがあるが、そのまま休眠を続け、越冬するものもあるという。春が来るとまた活動を始め、雌は四月上旬にエノキの新芽に産卵して生涯を終わる。したがって、成虫態としては六月から翌年の四月まで、比較的長寿の蝶である。

4

その他、キャンパスには、注意すればさまざまの蝶が発生している。エノキにはテングチョウも発生しているし、一叢のホトトギスの葉にルリタテハの幼虫がついているのをみかけることがある。御所と相国寺を控え、同志社自身にもまだかなりの樹が残っていて、市街地の中としては比較的緑の濃い環境にある。東京都内では、以前は多かったゴマダラチョウが、エノキは残っているのにほとんど姿を消した、ということを聞いた。大気汚染の影響であろう。豊かな緑ときれいな空気につつまれて、蝶たちも伸び伸びと育つ環境に、キャンパスがいつまでもあって欲しいと願うものである。そして、ふと思うことがある。それぞれの食樹、食草を食べて、蝶たちは美しく舞い立っていく。女子部に学ぶ生徒・学生諸君は、何を心の糧に摂取して学園を巣立っていくのだろうか……。

（女子中・高教諭・社会）